

びわこの 考湖学

—第2部—

4

本後紀」嘉祥2年(849)7月27日条)。近江国栗太郡の人、正六位上行左少史兼竿博士小槻山公今雄・主計竿師初位小槻山公有緒等の本籍を改めて、左京四条三坊に移したへ「日本三代実録」貞観15

「主計竿師」という彼らの官職名です。竿(算)博士とは当時の国立大学において算術の教官のこと。また、主計竿師とは国家財政を司る役所である主計寮において税などの収入や役所での支出を管理する

大史は実務官僚の実質上のトップであり、後に「官務」と称しました。とくに摂関時代になると政治が型式化して、先例に基づいた儀礼に重きが置かれるようになります。先例やならわし・しきたりを熟知

朝廷支えた実務官僚の家系

年(873)12月2日条)。

る役人でした。いずれも経理能力が必要な職です。

した実務官僚はあなごりがたい存在となっていくます。

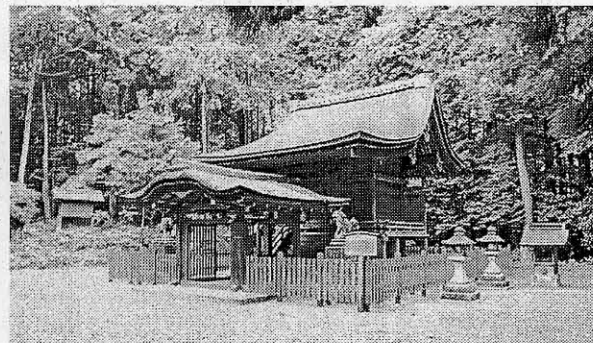
これらは、いずれも栗太郡に本籍を置いていた小槻山君(公)が居住地を平安京内に移すことを認めた記事です。このなかで注目されるのは、「左少史」・「竿博士」・

「左少史」については少し説明が必要です。当時の律令政府の政府組織は最上位に太政官があつて諸官庁を統括していました。太政官は政務審議部門(左右大臣・大納言など)、その秘書部門(少納言局)、諸官庁・諸国からの事務を受理伝達し、議定された決定を施工する事務処理・執行部門(左右弁官)から構成されます。

小槻山公今雄の3人の子息はいずれも竿博士となり、財政の局長である主税・主計頭を歴任しました。その後この左大史の職を小槻氏の一門が世襲し、代々にわたって独占します。そのため「官務家」が小槻氏の代名詞とされるようになります。その後、小槻氏は大宮家と壬生家の2派に分かれましたが、官務家としての道を歩み、朝廷の家産的職務を長らく担い続けることになりました。

「左少史」は左弁官に属する実務官僚です。この左右弁官には大弁・中弁・少弁、その下に大史・少史という官僚があり、弁は参議などに昇進できますが、史は基本的に昇進の道はなかったため、結果として長年にわたり実務を担当することになりました。

近江から出た豪族小槻氏は歴史の表舞台で華々しく活躍したわけではありませんが、その舞台を裏方として長きにわたり着実に支え続けたのです。



小槻大社

小槻大社と小槻山君

この立地と名称のためか、もともと「小槻山君」の祖神を祀っていたものが、いつしか「司水神」水の神様」を祀る性格を持つようになりました。境内掲示板によれば、社内には水の神である龍神池童王像が安置されており、日照りの際にはこの尊像を池中に沈めて雨乞いをしたようです。

また、小槻大社の境内には小槻大社古墳群があるほか、周辺には下戸山古墳・地山古墳などの首長墓と目される古墳が点在していますが、これらの古墳を造営したのも小槻山君と考えるのが自然でしょう。つまり、小槻山君は古墳時代以来、栗太郡を本拠とする有力な古代豪族であったのです。そして、このような近江の在地豪族であった小槻山君、そしてその系譜を引く小槻氏は古代以降中央政界のなかで重要かつ特異な地位を占めることとなります。

さて、小槻山君の一族が歴史書に具体的な名を表すのは、天平9年(737年)に采女である小槻山君広虫が外従五位下に叙せられたとする『続日本紀』の記事を端緒とします。この記事からは、奈良時代に小槻山君一族から采女が貢進されていたことがわかります。

その後の平安時代には、次のような関係記事があります。9世紀中ごろの仁明天皇のとき、近江国栗太郡の人である木工大允正七位下小槻山公家嶋に平安京内の左京五条六坊に宅地を賜ったへ『続日

(財団法人滋賀県文化財保護協会 辻川哲朗)